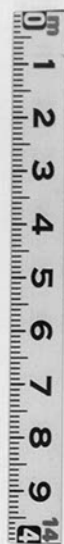


路傍詩

八



路
傍
詩

三野混沌

全く掩ふてゐる
かびてゐる

からだ
土

暫く立つてみてみよ
極そつとしておけ
極そつとおれをおけ

朝

石川武夫

――砂に痕る母子の足跡
夜雲を繚りよせてゐる山
渚で銀色の泡を食べてゐる魚

草を背負った馬が陽に向つて歩いて行く
その草が千刃の露できらきら光つてゐる

ある時

高橋水声

膨れほつた喉を
かみみにうつれた
おや！ 眼玉がまつかんだそ
さうする
おれはよつほどないたんだな
こんな
気がおちしつまるなんて
なくことは
まつたくい、ことと思ひます
ないて、ないて
なけなくなつたり
おれのころは
はつかしさでいつはいいだ

秋の詩

十三

中野勇雄

馬が並んで尾をふつてゐる
馬が並んで尾をふつてゐる
赤トンボよ
煤煙の聲をききたてるな
馬といつしよに並んで
この垣根に休んでゆけ

秋情

高瀬勝男

泣きたいものだ
泣きたいものだ

只一本の蘆葦草と思へば
湖面をかよう秋風に哭ありわすれ難くたのし

小鳥習好く泳ぐを覚えし

落

鰯船の海がいにあー

カモメも染めだしていにあー

舟が滯いてゆくと
いせいのいい音頭かきかゆるんだ

防波堤の上の燈台

●
いもの葉づいのゆれるたんび
そりや 呼びかける白いたまっころ

松本純一

つツッほの母親が生々しい眠りを子供の腹によそった
あの おちちのひとにきりだつけ

●
鳴りひびく
虚空いちめんの地殻
眼を走へるあはらちに
ひとりではめって了う自分の息だ

とうとりとろり
とうとうとろり
かたまって
握られろ
うつぶせたたまひ

● 店記 ●

・中八輯・

● 俺達の生活の公義は表現することなんだ、何物かを表現しなけれはいられないのだ、創造は主我という最善なる道徳的力の行端をもつて藝術美を彫出する直観の必然性をおたへて呉れたのだ、俺達の人生はかである、美である、表現しようとする時、意志は蒼空の如く自由な人格を豊饒にレてゆくことは当然だ。
——高瀬勝田——

● 仲秋、しんみりとすだく、どっかに路傍詩の宿がある、おとく刷かれた山端の空に、虹の架かはられてとてもなつこい、路にならんが皆んなかほに、こころかヒラヒラ動いてゐる、からだにいついかにふき溢れた詩がこの路に広々と植えられた、深い底から明るい力で、いつも押し上げて呉れる高橋さんが、今日も夏面目な呼吸をはづませてみた、——松本純——

大正十五年九月二十八日版

福島縣平町田六十二番地

「路傍詩」社

・寄贈録・謝

編輯発行人

高瀬勝田・松本純

